

JCLU2022 年 7 月例会

『テクノロジーと差別 ネットヘイトから「A I による差別」まで』（解放出版社）
編著者に聞く

ネットヘイトに焦点を当てて

2022 年 7 月 16 日（土）14：00～

（開場：13:30）

会場：専修大学 神田キャンパス 7 3 1 教室
（7 号館 3 階）

<表現の自由>を考える連続講演会共催！

詳しくは裏面をご覧ください。

（東京都千代田区神田神保町 3—8）

参加費：無料

事前申込制

第一部 基調講演 宮下萌さん（弁護士・JCLU 会員）

第二部 対 談 山田健太さん（専修大学教授・JCLU 理事）

2022 年 2 月に出版された『テクノロジーと差別 ネットヘイトから「A I による差別」まで』（宮下萌編著／解放出版社）を記念して例会を開催いたします。本書では、インターネット上のヘイトスピーチ、サイバーハラスメント、A I プロファイリング、テクノロジーの直接的・間接差別的設計・利用やテクノロジーがもたらす構造的差別等、様々な角度から「テクノロジーと差別」の問題を包括的に取り上げ、全体像を把握することを試んでいます。「テクノロジーと差別」というテーマは「古典的」かつ「新しい」問題であり、「テクノロジー分野から出発するアプローチ」と「差別撤廃から出発するアプローチ」という異なる二つの視点が必要となる分野です。技術的な側面のみから差別撤廃を目指すことは不可能であることはもとより、「テクノロジーと差別」というテーマにおいては、技術的な側面を無視して差別を根絶することはできません。第一部に編著者である宮下萌さんを講師に「テクノロジー」と「差別」が重なり合う問題についてご講演いただき、第二部に山田健太さんと対談を行います。本書と講演をきっかけ「テクノロジー」と「差別」が重なり合う問題について皆様に考えて頂くきっかけとなればと思います。どうぞご参加ください。

【申込方法】 JCLU ホームページ（URL：www.jclu.org）からお願いいたします。

右 QR コードからは申込フォームへ直接アクセスできます。

- ◆申込〆切 7 月 15 日（金）正午まで
- 本講演の録画、録音は、ご遠慮願います。
- 感染症対策のため、会場では不織布マスクの着用をお願いいたします。
- 発熱等、体調の悪い方は当日の参加はご遠慮願います。



寄付のお願い J C L U の活動は皆さまの寄付によって支えられています。JCLU の活動にご賛同いただければ、是非ご寄付をいただけますようお願いいたします。寄付のご案内は、JCLU ホームページをご確認ください。皆さまの温かいご支援をお待ちしております。

【主 催】公益社団法人自由人権協会（J C L U）・専修大学ジャーナリズム学科・現代ジャーナリズム研究機構

【問合せ】公益社団法人自由人権協会事務局 TEL:03-3437-5466 e-mail: jclu@jclu.org

<表現の自由>を考える連続講演会・シンポジウム

JCLU 共催で以下の講演会・シンポジウムが予定されています。あわせて、ぜひご来場ください。

いずれも、専修大学ジャーナリズム学科・現代ジャーナリズム研究機構との共催で行われるもので、

場所は7月例会と同じ、**専修大学神田キャンパス731教室（7号館3階）**です。

事前申込不要、参加費無料です。皆さまのご参加お待ちしております！！

◆7月2日(土)14:00～(開場:13:30～)

攻めて守る表現の自由

～『表現の不自由展 東京 2022』を開催して

講師:岩崎貞明さん

(メディア総合研究所事務局長・放送レポート編集長・表現の不自由展東京実行委員会共同代表)

聞き手:山田健太さん(専修大学教授、JCLU理事)

名古屋で開催された国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」における展示中止事件から3年、JCLUではその直後に、「あいちトリエンナーレ、その後」と題し、表現の自由の観点から10回にわたる連続講演会を開催し、主催者、キュレーター、研究者などを招き、議論を重ねました。さらにコロナ禍の中で、焦点となった「表現の不自由展」実行委員会は、海外での巡回展に続き、東京・名古屋・大阪で展示会を企画しましたが、東京の回は抗議行動によって延期を余儀なくされ、本年に入って国立市の公共施設でようやく実現しました。今回は、展示を実行するために法的手段はじめ妨害行為に対抗し、いかにして表現の自由を守り抜いたかについて、その最前線に立ち運営されてきた岩崎さんからたっぷりお話を伺います。それはまた、私たち一人ひとりが、いま何をすべきなのかを考えるための機会でもあります。

◆7月30日(土)14:00～(開場:13:30～)

戦争報道の価値と難しさ～ウクライナ取材・報道を通じて考える

パネリスト:綿井健陽さん(ジャーナリスト/アジアプレス)

須賀川拓さん(TBS中東支局長)

山田健太さん(専修大学教授、JCLU理事:進行役)

危険地取材について日本は必ずしも好意的な国ではありません。政府は、戦争・戦闘状態になるとすぐに避難勧告を発し、一般市民だけでなく報道機関に対しても退避を求めます。そして、万が一、戦闘に巻き込まれたりすると自己責任であるとして突き放したり、帰国後にパスポートを取り上げ、海外取材に行くことを物理的に妨害することを厭いません。残念ながら社会全体も、そうした空気感が定着していて、ジャーナリストが現場に行くことの必要性や価値について、必ずしも理解があるとは言えません。そうした中で大手メディア(放送・通信・新聞)も一般に、戦地に行くことを忌避する傾向が強いなか、果敢にチャレンジしている社の1つがTBSで、当日は現地特派員をお招きします。ただし、今回のロシア・ウクライナ戦争においても、最前線に立つことが多かったのはフリーのジャーナリストたちでした。そのおひとりとして、現場からTwitter等での速報を送り、放送、誌面でも積極的に発信を続ける綿井さんをお招きしました。一方で、今回の戦争は、市民発の動画やメッセージが現場から数多く発信されたり、侵攻される側に多くのジャーナリストが入って取材するという珍しい状況も起きました。いま戦争報道はどう変わりつつあるのか、何がジャーナリスト自身、そして社会に求められているのかをみなさんと一緒に考えます。

【特記事項】

- 本講演の録画、録音は、ご遠慮願います。
- 感染症対策のため、会場では不織布マスクの着用をお願いいたします。
- 発熱等、体調の悪い方は当日の参加はご遠慮願います

【主催】専修大学ジャーナリズム学科・現代ジャーナリズム研究機構【共催】公益社団法人自由人権協会(JCLU)

【問合せ】専修大学ジャーナリズム学科山田研究室 FAX:044-911-1287 e-mail: senshu.journalism@gmail.com